

ひょうご 水百景

No.86 新川運河（神戸市兵庫区）

～兵庫城跡に最初の兵庫県庁を設置～

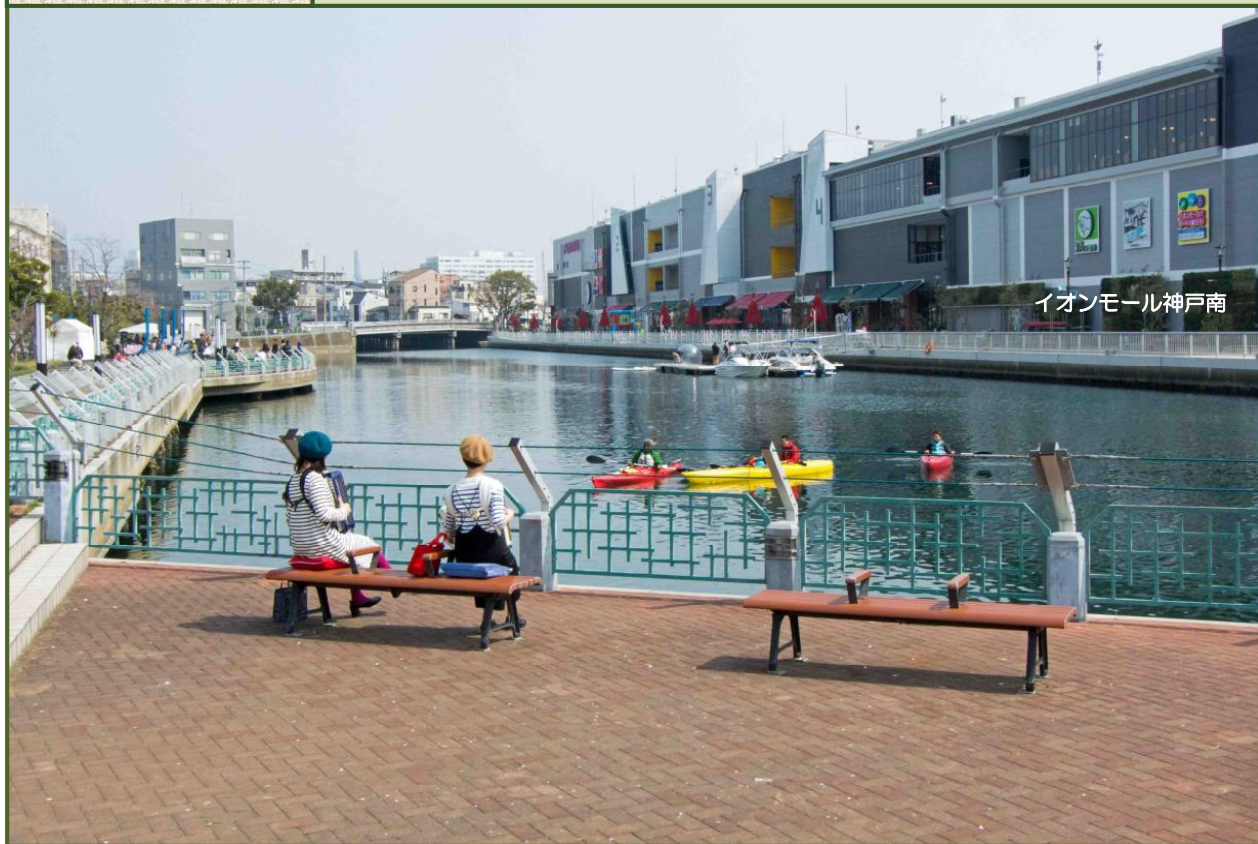


写真-1 新川運河キャナルプロムナードにて（平成 30 年 3 月撮影）

■ にぎわいのキャナルプロムナード

上の写真は、平成 30（2018）年 3 月 25 日に新川運河キャナルプロムナードで開催された「第 4 回あの運河で逢いましょう～兵庫運河周辺地域のにぎわいづくり～」のイベント会場で、本番前に練習するアコーディオンデュオと、その演奏に聴き入っているカヌーイストたちを撮影したものです。

昨年 9 月には神戸開港 150 年の記念イベントとして、市場まつりと兵庫運河祭が連携した「輝く兵庫まつり」が、ここで盛大に行われました。

新川運河周辺はその昔「兵庫津（ひょうごのつ）」と呼ばれ、日宋貿易、日明貿易の拠点として発展してきました。まずは「兵庫津」の歴史を紐解いてみましょう。



写真-2 平成 26 年 9 月 兵庫運河祭にて

■ 平清盛、大輪田泊を整備し日宋貿易の拠点とする

平安時代末、平清盛^{※1}は日宋貿易の拠点とするため、行基が設けた摂播五泊^{※2}の一つ、大輪田泊（おおわたのとまり）を大々的に整備します。この港は水深が深く、六甲の山並みが北風を遮り、和田岬が南西の風を遮ってくれますが、唯一の欠点として南東からの風は遮るものがなく、この向きから強風が吹くと船が安全に出入りすることができませんでした。

そこで清盛は、防波堤の築造工事に着手します。会下山（えげやま）の南にあった塩樋山を崩し、その土砂を大輪田泊の沖まで運び、防波堤の役割を果たす島を埋立造成しようとしますが、潮の流れが速く工事は難航、占いの結果「海中の龍神を鎮めるため、30 人の人柱を海中に沈めて龍神に捧げ、それを基礎として工事をすればよい」とのお告げ。

早速、旅人狩りが始まり、捕まえられた人々の泣き声が響き渡ったといわれます。それを見かねた清盛の侍童で松王丸（まつおうまる）という 17 歳の少年が、「私が喜んで 30 人の身代わりになります」と清盛に訴え、清盛もその申し出を聞き入れ、石櫃に入れられた松王丸は海中に沈められます。人々は一切経を書き写した大小の石を海中に投げ入れ、それを礎として承安 3（1173）年に築島工事（防波堤）が完成し、引き続き築港工事が続けられます。この島は、石に書き写されたお経から「経が島」と呼ばれるようになりました。後に清盛は、松王丸を弔うため寺を建てます。これが、島上町の経島山・来迎寺のおこりと伝えられています。

治承 4（1180）年 6 月、清盛は福原遷都を断行しますが、反平家勢力の挙兵に伴い半年後に還都（元の都に戻すこと）。翌治承 5（1181）年 2 月、清盛は熱病でこの世を去ります。

やがて源平合戦に敗れた平家は滅び、建久 3（1192）年源頼朝が征夷大将軍に任じられ鎌倉時代が始まります。この頃から大輪田泊は兵庫津と呼ばれるようになり、これが現在の兵庫港の始まりといわれています。

※1 平清盛：元永元（1118）年伊勢平氏の棟梁・平忠盛の長男として生まれ、平氏棟梁となる。保元の乱で後白河天皇の信頼を得て、平治の乱で最終的な勝利者となり、武士としては初めて太政大臣に任ぜられる。娘の徳子を高倉天皇に入内させ「平氏にあらずんば人にあらず」と言われる時代を築いた。平氏の権勢に反発した後白河法皇と対立し、治承 3（1179）年の政変で法皇を幽閉して、徳子の産んだ安徳天皇を擁し政治の実権を握るが、平氏の独裁は貴族・寺社・武士などから大きな反発を受け、源氏による平氏打倒の兵が挙がる中、治承 5 年閏 2 月 4 日（1181 年 3 月 20 日）熱病で没した。享年 64。



写真-3 平清盛像

※2 摂播五泊（せっばんごはく）：奈良時代の僧侶・行基が開いたとされる摂津・播磨の 5 箇所の港。河尻泊（かわじりのとまり：尼崎市神崎町）、大輪田泊、魚住泊（うおすみのとまり：明石市大久保町）、韓泊（からどまり：後の呼び方=福泊：姫路市的形町）、室生泊（むろおどまり：たつの市御津町）。

■ 室町時代から江戸時代の兵庫津

① 室町時代：足利義満が兵庫津を日明貿易の拠点とする

明德 3（1392）年に南北朝の合一を成し遂げた将軍・足利義満^{※3}は、幕府の財政を安定させるため、明との貿易を始めます。義満が明に使節を送って正式な通商を求めた結果、応永 11（1404）年にやってきた明の使いが、渡航許可証である勘合（明政府が発行した合札で倭寇と区別するための証明書）を持参して正式に貿易が開始されました（勘合貿易）。

この貿易は断続的に 16 世紀半ばまで 150 年間続き、前半期は兵庫津が大きな役割を果たし、後半期は堺や博多の商人が活躍しました。日明貿易に使われた遣明船は 17 回、90 隻仕立てられましたが、2/3 以上の 13 回、66 隻が兵庫津から出帆したそうです。

※3 足利義満：室町幕府第 3 代将軍（在位 1368～1394 年）。父である第 2 代将軍・足利義詮（よしあきら）の死後 10 才で家督を継ぎ、応安元（1368）年将軍家を継ぐ。成人後、管領・細川頼之は康暦元（1379）年に起きた康暦の政変で失脚、義満は南北朝の合一を果たし、有力大名を押さえて幕府の権力を確立させた。また、明との国交を樹立し応永 11（1404）年から勘合貿易を始めた。文化面では金閣寺を建立して北山文化を開花させるなど、室町時代の政治、経済、文化の最盛期を築いた。義満は、邸宅を北小路室町へ移したことにより「室町殿」とも呼ばれた。後に足利将軍を指す呼称となり、政庁を兼ねた将軍邸は歴史用語として「室町幕府」と呼ばれることになった。応永 15（1408）年没、49 才。



写真-4 金閣寺

② 戦国時代：戦乱に巻き込まれ貿易港としての地位を失う

15 世紀後半、応仁の乱の巻き添えで兵庫は焼失し、兵庫津も貿易港としての地位を失います。

安土桃山時代になると、織田信長の命を受けた池田恒興（信輝：池田輝政の父）が、信長に反旗を翻し摂津・花隈城（花熊城）に籠もる荒木村重を破り（花隈城の戦い）、その旧領を領有します。恒興は花隈城には入らず、天正 8（1580）年花隈城の遺材も加えて兵庫津に天守閣を備えた兵庫城を築きます。三重の門を持ち、周りに堀と土塁をめぐらし、防備のために多くの寺院を配置した立派な城だったそうです。

恒興は天正 11（1583）年に美濃国の大垣城に転封となり、兵庫と尼崎が三好（豊臣）秀次に与えられます。天正 13（1585）年に「賤ヶ岳七本槍」の一人に数えられた片桐且元（かつもと）が代官として入城、兵庫城は「片桐陣屋」と呼ばれるようになりました。



写真-5 花隈城址

③ 江戸時代：瀬戸内航路・西廻り航路の要港として栄える

元和元（1615）年の大坂夏の陣で豊臣氏が滅びると、兵庫城は廃され幕府領となります。元和 3（1617）年、兵庫津一帯は尼崎藩に組み込まれ、同年兵庫城跡に兵庫陣屋（兵庫津奉行所）が置かれます。

平和な時代が続くと人やモノの流れが活発になり、幕府直轄領の年貢米を輸送するために、河村瑞賢は寛文 11（1671）年に陸奥国と江戸を結び東廻り航路を開き、翌年には出羽国と江戸を結び西廻り航路を開きます。

これにより兵庫津は、西廻り航路を往来する北前船の寄港地となり、瀬戸内海随一の物資の集散地として活況を呈することとなります。北前船の往来は海運のさらなる発達を促し、周辺の農村部における生産量の増加など地域の発展に重要な役割を果たすとともに、船の修理や建造に関係する職人が集まり、技術の集積も見られるようになりました。

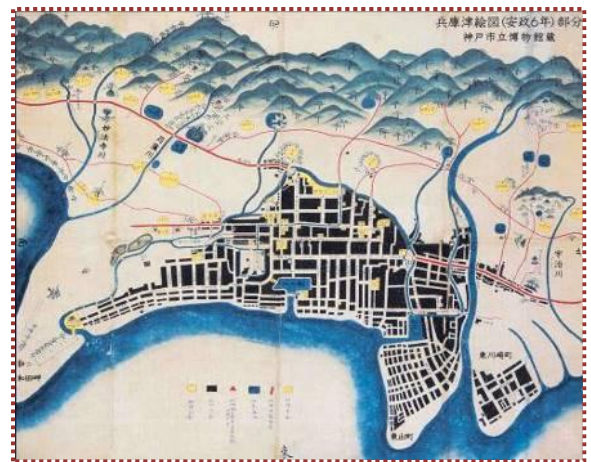


図-1 安政 6 年の兵庫津絵図の一部
（「新川運河の歴史」説明板から引用）

寛保 3（1743）年高砂生まれの工楽松右衛門は、兵庫津を拠点として廻船業を営んでいましたが、天明 5（1785）年木綿を使った厚手で大幅な新型帆布「松右衛門帆」を発明し、航海技術に革新をもたらします。（『ひょうご水百景』No.76 参照）また、22 歳の時に兵庫に出てきた高田屋嘉兵衛は、そのわずか 4 年後の寛政 8（1796）年に当時日本最大の千五百石積みの巨船「辰悦丸」を建造して海運業に進出、北海道周辺の航路を開発します。（『ひょうご水百景』No.81・82 参照）

なお、明和 6（1769）年上知令（江戸幕府が出した土地没収の命令）により兵庫津一帯は再び幕府領となり、兵庫陣屋が「大坂町奉行所兵庫切戸町勤番所」として改築されます。

ここまで書いてきてふと疑問が。兵庫城は豊臣家の滅亡（慶長 20 年の大坂夏の陣）の後に城郭としての機能が廃止されますが、これは慶長 20（1615）年に出された一國一城令により兵庫城が破却されたことを意味しているのでしょうか。気になるのは文禄 5（1596）年に発生した慶長伏見地震^{※4}です。この時、兵庫津も一軒残らず崩れ、その内から火が出て「人死す数は知れず候」と資料に記されているので、兵庫城がこの地震による倒壊・焼失を免れたとは思えません。この点を明確に記した資料が見つからないので何ともいえませんが、いずれにしても兵庫城が城郭として存在した期間は短かったようです。

※4 慶長伏見地震：文禄 5 年閏 7 月 13 日（1596 年 9 月 5 日）子の刻（24 時前後）に発生した大地震である。京都・伏見付近を通る有馬-高槻構造線及び六甲・淡路島断層帯を震源断層として発生した M 7.25~7.75 程度と推定される直下型地震で、京都では東寺や天龍寺等が倒壊し、死者は 1,000 人を超える。完成間近の伏見城天守もこの地震により倒壊し、城内だけで 600 人が圧死したとされている。被害は京阪神・淡路島の広い地域に及び、大坂・堺・兵庫（現在の神戸）では家々が倒壊、玉津田中遺跡（神戸市）や田能高田遺跡（尼崎市）等で、液状化現象が発生した痕跡があり、西求女塚古墳（神戸市灘区）における墳丘の地すべりは、この地震によるものであると推測されている。この地震の 4 日前には現在の愛媛で中央構造線を震源とする慶長伊予地震が、また前日には現在の大分・別府湾口付近で別府湾-日出生断層帯の東部を震源とする慶長豊後地震（共に M7.0 と推定）が発生しており、両地震による誘発地震の可能性が指摘されている。これらの天変地異が影響して、同年中に文禄から慶長へ改元が行われた。

■ 明治維新：兵庫県が誕生し、県庁を兵庫城跡に設置

明治維新となって新政府は、慶応4（1868）年1月22日周辺の旧幕府領を管轄するため、兵庫城跡にあった勤番所に兵庫鎮台を設けます。

2月2日に兵庫裁判所と改称し、5月23日には「兵庫県」と改められました。

これが最初の兵庫県庁で、伊藤俊輔（後の伊藤博文）が初代兵庫県知事に就任します。

新川運河沿いに「兵庫城跡～最初の兵庫県庁の地」と刻まれた石柱が建てられていて、横の説明板には下記のように記されています。



写真-6 兵庫城跡の説明板と「兵庫城跡・最初の兵庫県庁跡地」と刻まれた石柱



写真-7 兵庫城跡の石柱の裏面

兵庫城跡と最初の兵庫県庁

天正八年（一五八〇）池田信輝と輝政父子が、花熊城を攻め落とした功によって兵庫の土地を与えられてから、兵庫は、それまでの室町幕府の権力を離れ、東大寺や興福寺と兵庫の関との関係も脱して、新たに織田信長の手に入り、これを機会に池田氏は花熊城の遺材も加えて兵庫城を築いた。その地点は現在の神戸市、中之島中央市場にかけて東西、南北ともだいたい一四〇メートルの地域で、周囲には幅三・六メートルの堀があった。

古来兵庫は、源平の合戦、湊川合戦以来たびたび大きな合戦があつて、そのつとどい戦災を受けた。兵庫に古いものが少ないのもその為であらう。しかし信長・秀吉による全国統一がなつてからはこの地方ではもう合戦がなく、兵庫の町は平和に栄えていった。

兵庫城跡は、江戸時代に入って元和三年（一六一七）尼崎藩領となつて藩の陣屋となり、明和六年（一七六九）幕府領となつてからは大坂町奉行所に所属して、与力や同心の勤番所として明治になるまで続いた。

新政府は慶応四年（一八六八）同年九月八日明治改元（一月二十二日）にこの城跡の一部に兵庫鎮台を設けたが、二月二日に兵庫裁判所と名が変わり、五月二十三日にまた「兵庫県」と改められた。つまりこれが最初の兵庫県庁である。その後、県庁は同年九月十八日、今の神戸地方裁判所の場所に新築移転、さらに明治六年五月現在地に移転した。

明治七年（一八七四）新川運河の開削が行われ、城跡の中心地はほとんど川敷になってしまった。

第1次兵庫県：明治政府が成立すると、大名領は藩として旧大名による統治が続きますが、旧幕府領は新政府が接收して府・県となり、これらを管理する事務所が全国に31ヶ所（9府22県）できます。兵庫県は、この中の一つとして慶応4年5月23日（1868年7月12日）に設置され、最初の県庁舎が兵庫城跡に置かれました。

第2次兵庫県：明治4年7月14日（1871年8月29日）廃藩置県が行われ、藩がそのまま県となり全国に302の県が誕生します。現在の兵庫県域には30を超える県が成立しました。しかし、同年11月には行政区画の全面改正が行われ、3府72県になります。兵庫県域は、兵庫（摂津の西部5郡）、飾磨（播磨全域）、豊岡（但馬全域、丹後全域、丹波3郡）、名東（阿波及び淡路全域）の4県に編成されます。

兵庫県庁舎は、神戸港開港以降港湾機能の中心が東部に移りつつあったので、明治元（1868）年9月18日神戸駅北の楠町にあたる坂本村（現在の神戸地方裁判所がある場所）に新庁舎を建設して移転、さらにその後の明治7（1874）年に現在の下山手通に移転しています。

第3次兵庫県：明治9（1876）年8月、飾磨県と豊岡・名東両県の一部が兵庫県に併合されて、ほぼ現在の県域が確定しました。これ以後を第3次兵庫県といいます。

■ 兵庫津遺跡の発掘調査

神戸市兵庫区中之島の神戸市中央卸売市場本場跡地において、兵庫津遺跡の発掘調査が平成 24（2012）年 2 月から行われ、兵庫城の堀の石垣が大きな改変を受けていない状態で見つかりました。この堀の位置は、江戸時代の元禄 9（1696）年に作成された絵図に描かれている兵庫城の堀の南側と南東角付近にほぼ重なることがわかり、築城時の兵庫城の一部が初めて明らかになりました。

兵庫城は、中心施設が置かれる主郭を中心に、東・北面に副郭が取り囲むように配置された梯郭式城郭で、発掘調査の成果と絵図から、南北約 150m、東西約 140m あったと考えられています。

堀の石垣は野面積みで、石材はほとんどが花崗岩ですが、一部に供養塔や墓石の五輪塔などが転用されていました。

また、主郭の石垣を安定させるため、石垣の基礎に胴木と呼ばれる木材が置かれていました。

この技術は、安土城などごく一部の城にしか使われていない当時としては最先端の技術で、信長が兵庫津を重要視していたことが伺えます。

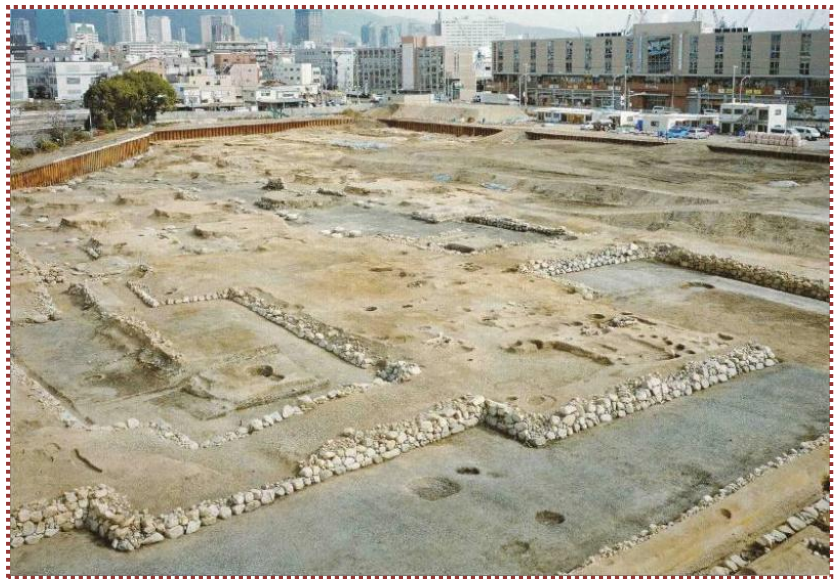


写真-9 兵庫津遺跡発掘状況（『こうべ発掘ニュース 最新号』から引用）

兵庫津は、明和 6（1769）年に尼崎藩領から幕府領に変わり、その際に城の堀は埋められて石組みの溝になり幕末に至りますが、その石組みの溝も今回の調査で見つかっています。

明治 7（1874）年に兵庫城の中心部を貫くように新川運河が開削され、また大正期には中央卸売市場が開場して、兵庫城は地上からその痕跡を消してしまいました。

なお、神戸市中央卸売市場移転に伴い、その跡地に大型 SC「イオンモール神戸南」が平成 29（2017）年 9 月オープンして大勢の人で賑わっていますが、その一角に兵庫城の石垣のレプリカが展示されています。

■ モノローグ

平成 30 年（2018）は、兵庫県が設置されてから 150 年目の節目の年になります。そして、その発祥の地が新川運河付近にあった兵庫城跡です。260 年余り続いた江戸幕府が崩壊し、明治新政府が足を一歩踏み出そうとしている時期で、国および地方の組織も変革していく混乱の中にあっただと思われますが、兵庫県も兵庫城跡の地において第一歩を踏み出したわけです。当時の県職員は、こういった気持ちで仕事に取り組んでいたのでしょうか。

ネムノキ（合歓木）

マメ科ネムノキ亜科の落葉高木。花は頭状花序的に枝先に集まって夏に咲く。淡紅色のおしべが長く美しい。香りは桃のように甘い。果実は細長く扁平な豆果。マメ科に属するが、マメ亜科に特徴的な蝶形花とは大きく異なり、花弁が目立たない。陽樹であり、荒地に最初に侵入する先駆種である。河原や雑木林に生え、高さは 10m にもなる。芽吹くのは遅いが、成長は他の木と比較すると迅速である。。和名は、夜になると葉が閉じること（就眠運動）に由来する。また、漢字名の「合歓木」は、中国においてネムノキが夫婦円満の象徴とされていることから付けられたものである。塩害に強く、耐寒性も高い。



写真-9 キャナルプロムナード沿いに咲いていたネムノキ

【参考資料】

- 1 『兵庫県史第五巻』 兵庫県 昭和 55 年 3 月
- 2 『こうべ発掘ニュース 最新号』（平成 28 年度神戸市埋蔵文化財センター夏季企画展） 神戸市教育委員会 平成 28 年 7 月
- 3 『新修神戸市史～歴史編Ⅲ近世』 神戸市 平成 4 年 4 月
- 4 『新修神戸市史～産業経済編Ⅳ』 神戸市 平成 26 年 3 月
- 5 『歴史が語る湊川』 新湊川流域変遷史編集委員会 平成 14 年 12 月
- 6 『神戸の史跡』 神戸市教育委員会編 昭和 50 年 12 月
- 7 『神戸開港百年史～港勢編』 神戸市 昭和 47 年 4 月
- 8 『平清盛、足利義満、慶長伏見地震、ネムノギ』 フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』

※発行：平成 30（2011）年 7 月 『ひょうご水百景』 No.86

改訂：令和 8（2026）年 6 月 『ひょうご水百景』 No.86